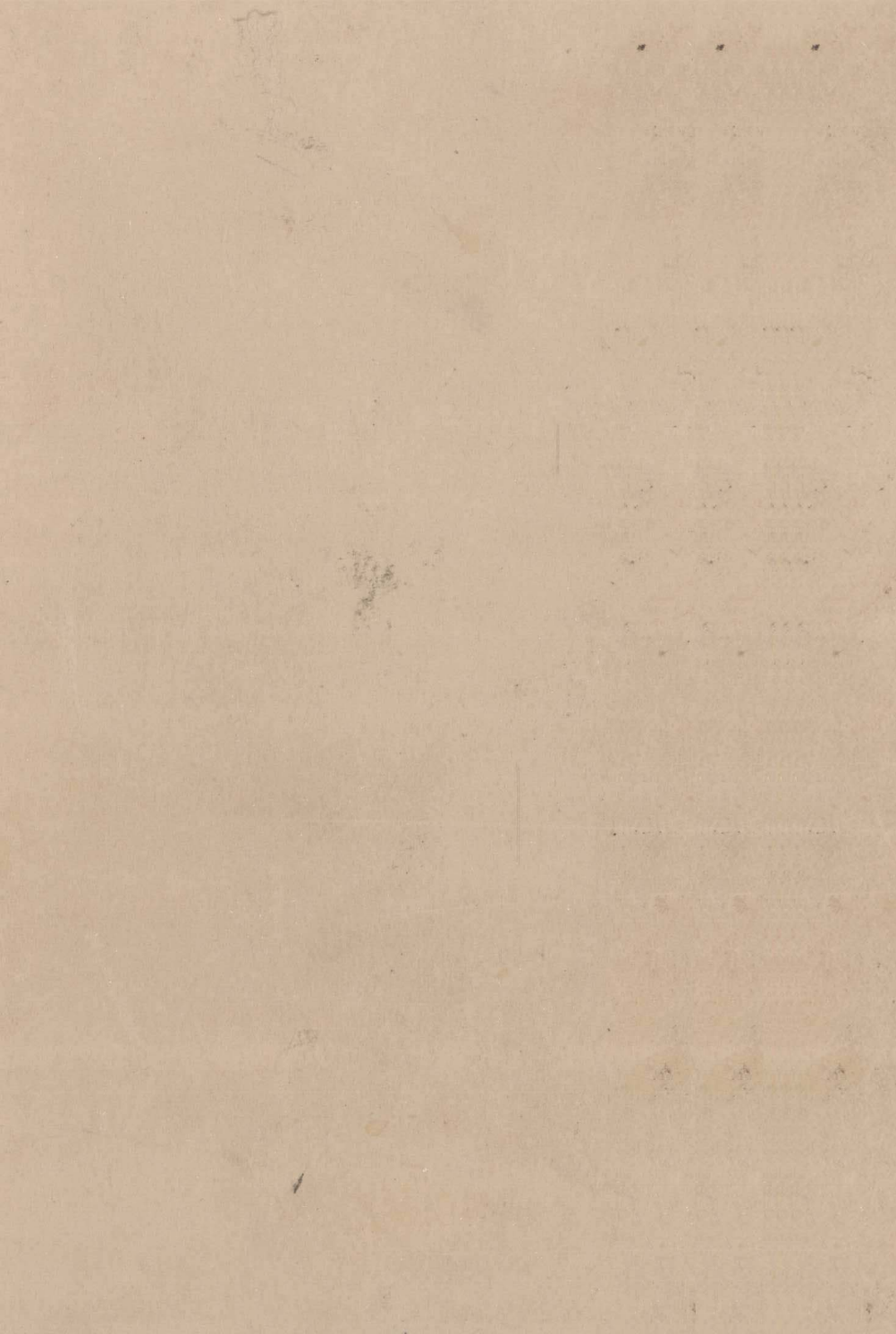




続・時代屋の女房

村松友禰



続・時代屋の女房

昭和五十八年六月二十日初版発行

著者 村松友視

発行者 角川春樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

発行所 株式会社角川書店



東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一（大代表）

振替口座東京三一―九五二〇八 千二〇二

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 0093―872362―0946(0)

日本音楽著作権協会（出）許諾番号八三五―七二三号

続・時代屋の女房

装订·插画

长友啓典
+
K2

1

「安さん、マンハッタンのカラスミなあ、あれまだ来いへんのんかいな……」

喫茶店サンライズのマスターが、やけに眠そうな顔で時代屋へ入ってくるなりそう言った。マスターの表情からは、退屈をもてあまして何か面白いことをみつげようという、例によって例のごときけはいが察せられた。寝不足のせいか目の下のあたりが粉を吹いたようになっており、髭ひげの剃りあとに切り傷が目立っている。凝りに凝った若造りの服装で年齢不詳に仕立てあげても、何かがマスターの自己演出を裏切ってしまう。だが、それが他人の目に見えてしまうとところに、安さんはマスターの軀からだのどこかにある正直さの匂においを嗅いでいるのだった。

「あれねえ、まだ着かないんですよ」

「毎年の行事になってたはずなのに、画かきの友だちやいう人、どないかしたんとかやうやろか」

「あいつは、アメリカに十五年も住んでるんだから、大丈夫だよ」

「しかしなあ安さん、近ごろのアメリカはぶっそうだって聞いてるでえ」

「いや、アメリカはむかしからぶっそうですよ」

「そらま、そうやけどな」

「でも、カラスミがとどかないのは、ちょっと心配ですね」

「安さんもそない思うやろ」

「あいつ、マンハッタンから引越したのかな……」

「ま、それならええけどな……。そやけど寂しいな、マンハッタンのカラスミを食べるちゅうのは、正月の儀式みたいなもんやったからなあ」

「年に一回ですかな、カラスミなんて食べるのは」

「ま、ねり物なら珍しいけど、高くてアホらしいわ、買うて食うのんは」

「そりやそうですよ」

「高い安いより、マンハッタンのカラスミちゅうのんがミソやな」

「マンハッタンのカラスミ、か……」

マンハッタンのカラスミは、安さんの美大時代の友だちである谷村が、毎年正月に送ってくる自家製のカラスミだった。谷村は、美大を出るとすぐにアメリカへ渡った。それは、画家になるためのとりあえずのプラン程度のことだったにちがいはなかった。静岡県の清水に住んでいる谷村の両親も、おそらくそんな感じでアメリカ行きをゆるしたのだろう。だが、谷村はそのままアメリカに居ついてしまい、十五年の歳月が経過している。最初は、水道の工事などを組合にかくれて請負い、アルバイトをかさねて画をかく費用に当てていたらしいが、最近はニューヨークでのグループ展の一員に加わるなど、少しは芽が出てきたようだ。

谷村は、アメリカへ渡ってから十年というものはいつさい音沙汰なしだったが、五年前に一枚の絵ハガキが安さんのもとへとどいた。それからというものの、クリスマス・カードと正月のカラスミが、安さんのもとへかならず送られてくるようになった。（谷村も、画かきとしての自信がついたみたいだな……）

安さんは、送られてきたクリスマス・カードやカラスミの礼状を出すでもなく、た

だ心の中で谷村の暮しぶりを想像していた。

谷村はマンハッタンの一角にあるアパートに住んでいるらしいのだが、冬になると魚市場からボラの卵巣を買ってくる。買ってくるといっても、アメリカ人にとってはボラの卵巣など値打ちはないらしく、タダ同様だと手紙に書いてあった。その卵巣にバーボンと醤油で味をつけ、アルミホイルにくるんで冷蔵庫へ入れる。これが、台湾あたりでの木蔭に干すのと同じ効果となつて、きわめて安あがりのカラスミが出来るのだという。それを「マンハッタンのカラスミ」と命名したのは、もちろん安さんではなく真弓だ。

大井三つ叉またの歩道橋の一方の端下にある、猫の額ほどの土地に掘立小屋同然の店をつくった安さんのところへ、真弓は猫を抱いてあらわれてそのまま居ついてしまった。「居つきたいうたかて、けつきよく安さんがやってしもたわけやからなあ、でかい口はたたけんで」

マスターが冷やかすように、真弓がはじめてやってきたその日に、安さんは真弓と体の関係ができてしまった。どちらが積極的であつたのか……それは今だに安さんにはよく分つてはいない。ネコを抱いて二階の物置き場兼寝室にあがつていった真弓は、

売り物と思ったのか安さんのベッドに仰向けになり、天井を見上げて何かを思うふうだった。しばらくして様子を見に行った安さんは、ごく自然に真弓が仰向けになっているベッドへ向った――。

「ゴーカン結婚なんて言いふらしてるらしいけど。真弓だってそのつもりだったんだろう」

「まさか」

「じゃあ、なぜあんなったんだよ」

「成り行きでしょ」

「成り行きを、拒もうとしなかったじゃないか」

「だって、アブサンの名前つけたお祝いだし」

「アブサンの名前を一緒につけたから、あんなったのか……」

「だって、ふたりでつけたでしょ、アブサンの名前」

「アブサン飲みすぎた酒場女のようなしわが囁れ声の猫だからアブサン……、あれはどっちがつけたんだっけ」

「だから、ふたりでつけたのよ」

「で、そのお祝いに、か……」

「そうよ」

安さんと真弓の会話は、いつもそんなところでケリがつく。安さんは、そんなふうにして話を終らせることによって、いつも真弓の過去の時間が消えてしまうことを感じていた。ふらりと家を出ていって一週間ほど経つとまたふらりと帰ってくる……過去に四度もあつた真弓の家出は、いったい何を意味するのか。安さんは、それを問い質したことがない。真弓も、それを打ち明けたことがない。それがふたりの生活の流れだとお互いにみとめているが、籍を入れているでもない真弓が、

「わたくし、時代屋の女房でございます」

などとおどけて見せる表情を、安さんはかわいいなと思つてながめるのだった。時代を売る商売だから時代屋……という名前をつけたのも真弓だった。そんな真弓のセンスが、ポップな古道具屋である時代屋の商法となり、ブームとまではいなくても、適当なお得意を相手にした商売としてはどうやら成り立っている。時代屋は女房でもっている……こういう近所の商店街や商売仲間の言葉も、安さんにとっては心地よい評判だった。

「マンハッタンのカラスミがあらへんとなるとやな、俺おれとこのツمامツマミで一杯飲のむしか仕方ないやないけ」

「マスターんここに、何か到来物でもあるんですか」

「ちがうがな、ねりもんのカラスミやがな」

「ああ、あのまづいやつ」

「ご挨拶やな、あれかて安さん、知らんで喰くってたら分らんがな」

「だけど、俺たちは谷村のおかげで知しっちゃったんだからな、本物のカラスミを」

「そやけどなあ、ほんまもん言うたかて、しよせんはマンハッタン製、台湾のカラスミとは格がちがうがな」

「じゃ、送おくってきてもマスターには分け前なし」

「そんな安さん、冗談やがな」

「友だちがせっかくマンハッタンから送おくってくれるんですからね」

「分わった分わった、取り消すがな」

「あの、カラスミは台湾が本場なんですか」

「そら、台湾も台南のカラスミいうたら有名やがな」

「くわしいですね」

「ああ……」

「あっち、行ったことあるんですか」

「いや、ま、いろいろあってな……」

マスターは、銀ぶちのメガネのふちにちよつと手をやり、息を吐くようにして外をながめるふりをした。聞かれたくないことを言われたとき、マスターがやる独特の仕種^{ぐさ}だった。マスターは、どこか自分の過去を隠して生きているといったけはいがあり、そのために不思議なセンスの会話で人を煙^{けい}にまく癖がある。マスターが喋^{しゃべ}る関西弁にしたところで、生れ育った土地の言葉であるかどうか疑わしいものだ。だが、そんな怪しさがときどき表面にちらついて見えるところに、安さんはマスターの屈折した正直さがあるような気がしている。

（軽犯罪しかできない人だな……）

そういう見定めが、安さんにマスターを信用できる人物とさせていた。マスターが経営する喫茶店サンライズの女店員ユキちゃんとの関係も、怪しいといえば怪しいが、何もないのにいかにもそれらしくふるまっているマスターの演技かもしれない。ユキ

ちゃんはユキちゃん、マスターの演技をそのまま受け入れているふうだが、それだつて本当のことを芝居めかして見せているのかもしれない。サンライズはまるで芝居小屋のように、見方によつて本当と嘘が入れかわつてしまうのだ。

「また、こんなところで井戸端会議かい……」

そう言つて入つてきたのは、三つ又から第二京浜へぬける道の踏切端にある今井クリーニング店の今井さんだ。

「井戸端会議で古い言い方やなあ、おれたちはディスカッションしとったんやで、なあ安さん」

「その、ディスカッションてなあ、いったい何なんだい」

「まあ、議論ちゆうとこかな、平たく言えば」

「議論なんて言葉、なんにも平たいこたあねえよ、ただくっちゃべつてただけなんだろうに」

「それじゃ今井さん、言葉に色気ちゆうもんがないがな」

「何言つてんだよ、議論の方がよっぽど色気がねえじゃねえか」

「そやけどな、男同士の井戸端会議ちゆうのんも気色きしきわるいで」

「でも、おれたちって、何となく井戸端会議ってイメージだね……」

安さんは、いつまでつづくか分らないマスターと今井さんのやりとりで口をはさんだ。今井さんは、近所では頑固な無骨者で通っているが、マスターと安さんの中へ入ってくると、とたんに江戸下町のベテランの目明しのようになる。何やら思案めいた表情を見せることが多いが、いたずらっぽく笑ったときに、子供みたいに無邪気な目をつくる。そして、それに気づいたようにすぐ真顔にもどし、奥歯にはさまったものを舌でまさぐり、焦点のきまらない目を宙にすえるのだった。マスターと今井さん、それに安さんは、それぞれに年齢もタイプもちがっているが、不思議なダチ公というところだ。

「なあ、おれたちって、三銃士みたいやな」

「三銃士……、あの、デュマの」

「いや、デマやない、ほんまに三銃士みたいや」

「デュマってのはね、アレキサンドル・デュマ、三銃士の作者ですよ」

「ほう、安さん、えらい学があるんだねえ、さすが美大出だけあらあ」

「何が美大出の学やねん。ただ画え描きよっただけやないか」

「まったく、その通りですよ」

「おい安さん。そないに謙虚になったらルール違反や、おれが野暮になるやないか」

「あ、そうか……」

「で、その三銃士てのは、いったい何なんだい」

「三銃士は三銃士やないか」

「あの、アトス、ポルトス、アラミスってやつかい」

「これおどろいた、今井さんの口からそんな名前が出るとは思わなかったで」

「マスター、人をなめちゃあいけねえよ、こう見えたってあたしゃ、なかなかの読

書家なんだぜ」

「へえ、そんなら外にどんなもん読んでるんかいな」

「ロビンソン・クルーソーだろ、それから仔鹿物語に……」

「もうええわ、それやったら少年少女世界文学全集の系譜やないか」

「何だろうが、読書は読書だよ、なあ安さん」

「そりゃ、そうですよ」

「安さん、おまえ今日は腰がきまつとらんで、ころころ態度が変わるやないか」

「そんなこたあねえよ、安さんは正しいことを言ってるんだ、なあ、安さん」

「で、おれたちが三銃士だとすると、誰がアトスで誰がポルトスで誰がアラミスなんですかねえ」

「おれが、アトスやな」

「何となく主導権にぎってるってわけですか、おれはキザなポルトスが似合ってると思うけどなあ」

「ああ、ポルトスな、あのキザ男は安さんの役どころや」

「おれ、そんなにキザですかねえ……」

「当り前やないか」

「マスターの方がキザでしょう、ねえ今井さん」

「いや、真弓ちゃんみたいな女房もって、古道具を商うなんざあ、キザと言えねえこたあねえなあ」

「あ、やっと今井さんと意見が合うたわ」

「そうですかねえ……」